

平成 24 年 8 月 13 日

南の風 13

南部ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

今回はインターハイの観戦記を書きます。とにかく金沢市は暑かったです。フェーン現象もあり、連日36度を超えていました。しかし、いしかわ総合スポーツセンターの体育館は冷房が効き、ゲームの観戦は快適でした。まず男子のゲームですが、決勝は洛南VS延岡学園の対戦でした。以下戦評風にかきます。両チームハーフマンツーマンでスタートした。1ピリに、リバウンドからの速攻で流れ掴んだ延岡がリードする展開となる。(24対13で延岡リード)2ピリになり、洛南はオールコートのマンツーマンプレスに出てリズムを引き寄せ、シュートの確率が高まった。前半を終了して40対33となり点差が一桁となった。3ピリに入ると延岡は、3-2のゾーンにチェンジし、得意の速攻に磨きをかける。洛南はオールコートから、1-2-2のゾーンにチェンジし相手の勢いを止めようとするが、延岡の速攻は続き61対41で3ピリが終了した。4ピリに入ると洛南は、もう一度オールコートのディフェンスで果敢にプレッシャーをかけた。スティールを連発し4点差まで詰め寄った。しかし延岡は、5番がファウルで得たフリースローを確実に決め、78対74で逃げ切った。延岡はノーシードからインターハイ2連覇を果たした。洛南は、最大24点あった点差を決して諦めず、持前の激しいディフェンスで4点差まで縮め、手に汗握る大接戦を演じた。国体やウインターカップでの活躍が楽しみなチームである。

女子は決勝よりも、準決勝の桜花学園VS昭和学院のゲームが見応えがありました。桜花学園はダントツの優勝候補でした。1ピリは両チームハーフマンツーマンでスタートする。桜花は出だしから中と外のバランスがよく得点を重ねる。昭和は動きが硬く、中々シュートまで結びつかない。10対2となったところで昭和がタイムアウトをとる。ディフェンスを3-2のマッチアップゾーンに切り替えると、オフェンスにもリズムが出始め3ポイントも決まりだした。23対19で桜花リード。2ピリは、桜花学園4番の活躍が光りペースを握る。その後も、昭和の3-2のマッチアップゾーンを苦しめず、得点を重ねた。5分間ノーゴールの昭和は、タイムアウトを取りオフェンスを立て直したいが、9番の3Pが単発に決まるだけであった。前半を終えて50-32で桜花がリード。3ピリは、昭和がスリークォーターからマンツーマン当たりプレッシャーをかける。オフェンスは、12番のゴール下と9番の3Pが立て続けに決まり追い上げ、66-53で望みをつなぐ。4ピリに入り昭和は、8番のジャンプショット、9番の3Pが決まりさらに食い下がる。しかし桜花は、慌てることなく12番がゴール下でしっかりショットを決め流れを渡さない。昭和は積極的にダブルチームを仕掛けボールを奪いにいくが、桜花の8番が落ち着いてゲームをコントロールする。桜花は8番、12番のシュートで点差を再び2ケタに広げる。昭和はオールコートのプレスで必死にボールを奪い、6番、9番のシュートで最後まで粘りを見せるが及ばず、83-73で桜花が勝利した。桜花学園は決勝でも、聖カタリナ女子を90-74で下し、見事優勝した。そしてこの優勝で、桜花学園は全国大会優勝50回という快挙を成し遂げた。

以上がインターハイ2試合の観戦記ですが、今年は男女とも、各ピリオドでベンチのタクティクスが変わる場面が多く見られ、展開が楽しかった印象でした。改めてピリオド制の面白さを感じる事が出来ました。来年こそ神奈川のチームがファイナルに残り、全国制覇の歓喜の場面が見られることを期待しながら、北陸金沢の地を後にしました。